【研究資料】

南アジアのバスケットボールに関する研究
―スプリングフィールド大学の歴訪の旅を視座に―

水谷　豊

A study of basketball in South Asia:
In point of view of the successive visits of the Springfield College

Yutaka　Mizutani

Abstract

In the year of 1965, The US Department of State chose the men's basketball team of the Springfield College (SC), MA, USA, which became the birthplace of the game in 1891, as the United States Education Mission to dispatch to Ceylon, now Sri Lanka, India and Pakistan in South Asia. The goals entrusted by The US Department of State to the team were to make the game spread and to deepen international friendship and goodwill through diverse occasions in those countries respectively.

It is the purpose of this study to clarify the basketball situation in South Asia until then as well as how the team ran their activities in the places where the team visited from Colombo in Ceylon to Lahore in Pakistan.

The followings are considered as the conclusion of this study.

１）Since the game of basketball was initiated in the SC, the ground that the SC was chosen by The US Department of State definitely convinced everyone in the US basketball world.

２）The YMCAs which the team visited in the countries were already founded before the visit of the team, and they had become the pioneers in spreading the game throughout the places.

３）Non-YMCA persons with enthusiastic or charitable for education including troops from the US to those countries also contributed to develop education and to initiate the game in the societies before their visit.

４）The SC was originally founded as School for Christian Workers in 1885. Then the name was changed to International YMCA Training School in 1891. Therefore it is probably considered that members of the team which travelled in South Asia equipped themselves for a good international sense as well, and could smoothly blend with the people in the places where they visited.

５）No cram practice is able to produce much result. The legacy of their visit to the countries was an inspire effect in the transitional process from the beginning days to the growth period of basketball after 1965.

Key words：US Department of State，Basketball mission，Spread
キーワード：アメリカ国務省，バスケットボールミッション，普及

１．緒　言

初めてのオリンピック東京大会が行なわれた翌年の1965年の９月８日（水），バスケットボールの競技会場となった国立代々木競技場別館において，アメリカのスプリングフィールド大学（以下，SC と表わす）と日本大学とのゲームが行なわれた[注1)]．そして，SC が74–61で勝利している[注2)]．

このことについて，SC のホームタウンのマサチューセッツ州スプリングフィールドの地元紙が次のように報じている．

「日本大学との一戦は特別だった．前年のオリンピックでビル・ブラドレー[注3)]たちが金メダルを獲得した後，あの素晴らしい体育館で初めてプレイしたアメリカチームとなったからだ．E. シュタイツ監督[注4)]は巧みにチームを集中させ，鼓舞して，好チームの日本大学を74–61の13点差で振り切った．」[注5)] 1)

周知のように，SC は1891年にバスケットボールの発祥の地となった，もと国際 YMCA トレーニングスクールである．そして，数多の卒業生を世界各国の YMCA に送り出し，それぞれの赴任地でバスケットボールの普及，発展に大きく貢献したことは多言を要さない．このことに関連して，次のようなコメントは看過できない．

「1965年に訪問させる東南アジアの国々の次代を担う若者たちにバスケットボールを手ほどきし，普及・発展のきっかけづくりを行なうチームとして，アメリカ国務省教育文化局は SC を選択，最終決定するまでにかなり慎重な検討を重ねたにちがいない．確かに，多くの人々が J. ネイスミス（James Naismith）博士が1891年に桃の収穫用の籠（かご）を使って創始したバスケットボールは，今日，アメリカの No. 1 スポーツにランキングされていると主張するのはもっともなことだ．けれども，（バスケットボール以上にビッグスポーツだと信じ込んでいる）野球とフットボールのファンはアメリカ国務省教育文化局の決定に対して素直に首をタテに振るはずがない．バスケットボールのファンの言い分を喝破する理由を掲げて，野球とフットボールこそが一番なのだという主張を引っ込めることはないだろう．」[2)]

ともあれ，アメリカ国務省教育文化局は SC に白羽の矢を立てた．そして，SC が受け取った旅程の中に「東京滞在」も含まれており，冒頭で述べた日本大学とのゲームが行なわれたものと考えられる．しかし，アメリカ国務省教育文化局が用意した SC チームの派遣地域は「東南アジア」としているが，実際に主たる対象国になったのはスリランカ（以下，当時の国名のセイロンと表わす），インド，パキスタンである．今日，この３か国は「東南アジア」ではなく「南アジア」とするのが一般的である．そこで，本研究では「南アジア」と表現し[注6)]，また，これ以外の地域は取り上げないこととする．

もとより，SC チームの３か国におけるバスケットボール活動の様子は興味深い．これら南アジアのバスケットボール事情もあまり知られていない．しかし，「アジアのスポーツ：グローバリゼーション，グローカリゼーション，アジアニゼーション」（Perter Horton, 2011）が触れている「アメリカとアジアのスポーツ」[注7)]という一節はひとつの傍証的参考になるかと思われる．本研究ではこれも視点の手がかりのひとつとしつつ，南アジアに位置するセイロン，インド，パキスタンのバスケットボールの実態と発祥地である SC チームの現地における活動とが解け合う様子の追究を試みる．これに1965年前後の関連する事柄を重ね合わせることによって若干の考察を行ない，今後の研究の資料としてまとめることを目的とする．

２．日　程

アメリカ国務省教育文化局の要請を受諾した SC はチーム編成を検討して，E. シュタイツ監督，トレーナー兼マネージャー，渉外兼広報担当，（通常は12名だが）プレーヤーを10名に減らした合計13名に人数を絞った．およそ２か月間に亘る旅のミッションは「主にユース年齢層を対象にした基礎プレイの手ほどき，模範ゲーム（地元チームとの対戦），延べ参加者80,000人を目標とした111回の講習会」という内容だった[3)]．旅程が決まり，出発は1965年７月11日（日）となった[4)]．

その日，キャンパスに程近いハートフォード（ブラッドレー空港）からニューヨーク（J.F. ケネディ空港）にトランスワールド航空（TW）で移動した．そして，パンアメリカン航空（PA）[注8)]の夜行便で大西洋を渡って12日（月）の朝にパリに到着した．

およそ24時間の滞在では“花の都”を楽しむ時間は無かったかもしれない．13日（火）の朝便でローマに移動して一泊した．接続便のための時間調整の合間にバチカン市国を見学している[注9)]．翌14日（水）の夕方，インド航空（AI）の夜行便でいよいよゲートウェイとなるインドのボンベイ（現ムンバイ）に移動，15日

表1　旅程

月日・曜日	発着地	時刻	便名
7月11日(日)	ハートフォード	16:15	TW#005
	ニューヨーク	16:57	
	ニューヨーク	20:30	PA#114
7月12日(月)	パリ	08:25	
7月13日(火)	パリ	09:25	PA#114
	ローマ	11:05	
7月14日(水)	ローマ	16:45	AI#1104
7月15日(木)	ボンベイ (ムンバイ)	05:00	
	ボンベイ (ムンバイ)	13:00	AE#206
	コロンボ	17:00	
セイロン(スリランカ)			
7月28日(水)	コロンボ	15:45	AE#207
	マドラス (チェンナイ)	17:40	
インド			
8月19日(木)	ニューデリー (デリー)	18:35	PK#205
	カラチ	20:55	
パキスタン			
8月29日(日)	カラチ	14:15	PK#304
	ラホール	16:55	
9月4日(土)	ラホール	18:00	IC#432
	ニューデリー (デリー)	19:55	
9月5日(日)	ニューデリー (デリー)	04:45	PA#002
	ホンコン	16:30	
9月7日(火)	ホンコン	05:30	PA#002
	東京	21:15	
9月9日(木)	東京	22:15	PA#002
	ホノルル	10:30	
	ホノルル	23:15	PA#838
9月10日(金)	サンフランシスコ	06:55	
	サンフランシスコ	08:45	AA#014
	ニューヨーク	16:40	

(木) 早朝に到着した．夕方，エア・セイロン航空(AE)[注10] に乗り継ぎ，ようやく午後5時にセイロンの首都コロンボに到着した．

チームはコロンボなどに2週間ほど滞在している．そして，28日（水），エア・セイロン航空（AE）で南インドの玄関都市のマドラス（現チェンナイ）に移った．8月19日（木）にニューデリー（現デリー）からパキスタンのカラチに移動していることから，マドラスなどのインド滞在は3週間近くに及んだことがわかる．その後，ニューデリーへは空路を使用していない．マドラスにはインド国内の数多くの都市間を結ぶ南アジア最大と言われるバスターミナルがあるので，長時間バスに揺られての移動だったかもしれない．あるいは，列車を利用したのかもしれない[注11]．

そして，8月19日（木）にパキスタン航空（PK）でカラチ[注12] に入ってから，10日間ほど滞在している．29日（日）にパキスタンではカラチに次ぐ人口規模を持つ第二の都市とされるインドとの国境付近のラホール[注13] に移っている．ここで9月4日（土）までの1週間ほど滞在している．

9月4日（土）にインディアン航空（IC）[注14] でニューデリーに戻り，翌日の早朝にホンコンに移った．そして，7日（火）の早朝にパンアメリカン航空（PA）で東京に移動した．8日（水）は先述したように，日本大学とのゲームを行なった．

9日（木）夜，パンアメリカン航空（PA）で帰国の途に就いた．ホノルルで約12時間滞在した後，同航空の夜行便に乗り換えてサンフランシスコに向けて飛び立ち，明けて10日（金）の朝6時55分に到着した．2時間そこそこの乗り継ぎ時間を過ごして，8時45分にアメリカン航空（AA）で発ち，アメリカを西から東へノンストップで一気に横断して，パリに出発したときと同じニューヨークのJ.F.ケネディ空港に夕方4時40分に帰着した．

3．訪問国のバスケットボールの歩みとSCチームの活動

❶セイロン

初めに訪れたのはコロンボだった．1880年にここで最初のYMCAが立ち上げられ，1968年には16に増加，正会員は3,500人に上っていた．加えて，延べ30,000人がプログラムに参加していたという[5]．この背景のもと，1912年にSCの前身の国際YMCAトレーニングスクールの卒業生（1904年）のJ.H.グレイ（John H. Gray）がコロンボYMCAでバスケットボールを紹介した[6]．そして，1917年にアメリカ人のコロンボYMCA体育主事R.W.キャマック（R.Walter Cammack）が後継した．1927年，男子大学生がプレイし始めて，他の多くの学校でも行なうようになった．1936年にはベルリンオリンピックに出場した日本とフィリピンの対戦が初めてスリランカで行なわれたという[7]．第2次世界大戦のとき，スリランカに駐留したアメリカ軍の兵士たちがプレイしているのに興味を持った人々が見よう見まねでプレイし始めた．そして，多くのチームが結成された．その結果，組織の必要性が高まり，1950年11月，コロンボ中央銀行頭取のJ.バクスター

（John Baxter）が会長となって，セイロンバスケットボール協会を設立した．さらに，学校のバスケットボールをまとめる組織が設けられ，大会も開かれるようになった[8]．

1958年，同協会がセイロンバスケットボール連盟（CBF）となり，1959年に国際バスケットボール連盟（FIBA：Fédération Internationale de Basketball Association）への加盟が認められた．この年９月，パキスタン代表チームを相手に初の国際ゲームを行なっている．1960年７月には第１回スリランカ選手権大会が開かれ，以後，毎年，開催されている[9]．1961年には女子もプレイし始めた．SC が訪れる前の1964年12月，セイロンバスケットボール連盟はインド，イラン，パキスタンを迎え，南アジア４か国対抗戦を開催した．そして，SC が訪れた翌年の1966年，第５回アジア大会（於・バンコク）に初めて出場した．11か国が参加し，最下位がミャンマーで，セイロンは10位だった．1967年にはミニバスケットボールが始まり，毎年，男女大会が行なわれるようになった．1969年，アジアバスケットボール連盟（ABC:Asian Basketball Confederation，現 FIBA アジア）への加盟が認められ，南アジアの国際大会に参加するようになった[10]．

さて，７月15日（木）にコロンボに着いてから，２週間ほどセイロンに滞在している．このとき，セイロン西部州バスケットボール協会（Ceylon Western Province Basket Ball Association）の W.H. サベリムット（W.H.Saverimuttu）会長がこのようなことを述べている．

「遠路はるばるコロンボにようこそ！　バスケットボール誕生の地からご来訪された皆様を心から歓迎します．この度の‘南アジア友好親善の旅’の最初の訪問地として，当地をお選びいただき感謝致します．また，アメリカ大使館の C.B. リオン（C.B.Lyon）大使ならびにアメリカ国務省のご支援のもと，今回の機会を与えていただいたことにもお礼申し上げます．私たちセイロンのすべての熱心なバスケットボール愛好者がアメリカの最新のスキルやゲームの“こつ”を学べるのを心待ちにしていました．」[11]

７月17日（土）には午後６時30分から SC と協会選抜チームの公開ゲームが陸軍バスケットボールコートで行なわれている[12]．さらに，スリランカ中部州のキャンディにある国立ペラデニア大学でも公開ゲームが行なわれた[13]．

SC チームがセイロンを離れた後に，アメリカ大使館の C.B. リオン大使は SC の W.E. ロックリン（Wilbert.E.Locklin）学長あてに，次のような書状を送っている．

「貴学の好感あふれるバスケットボールチームの当地への訪問をうけたことは光栄であった．チームの米錫（アメリカ―セイロン）関係の改善への寄与がいかに大きかったか，ご高察いただきたい．爽やかで溌剌としたプレーヤーたちはバスケットボールを通じてセイロン人の懐を開いた．講習会に参加，見学していたセイロン人には，チームの誠実なコーチングとティーチングはいつまでも忘れられないものになった．セイロンのバスケットボールをリフレッシュさせ，レベルアップさせた．再度のご来訪が待ち遠しい思いをお伝えする．」[14]

帰国後の SC チームがセイロンの思い出として，このようなことを述べている．

「中部州の王朝最後の都キャンディとコロンボとの間を列車移動したときだった．あの車窓から見た景色の素晴らしさは忘れられない．」[15]

❷インド

７月28日（水），インドのマドラス（現チェンナイ）に移った．インドの最初の YMCA は1854年にカルカッタに創設されたが，その後の運営，維持の道のりは険しかった．しかし，1875年にボンベイ（現ムンバイ）とラホールでも YMCA が組織された．1889年に D. マッコノーイ（David McConaughy）が体育・スポーツも担当する初めてのフルタイムスタッフとして，アメリカ・カナダ YMCA 同盟から派遣されてきた．着任の翌年，マドラス YMCA の立ち上げに尽力した[16]．1968年には国内 YMCA は81に上り，正会員は21,000人，プログラム参加者は延べ200,000人と報告されている[17]．

1902年，カナダ人の T.D. パットン（Thomas Duncan Patton）[注15]がマドラスの YMCA 体育大学に着任して，バスケットボールを初めて手ほどきした[注16][18]．その後，1934年からインドオリンピック委員会がインド選手権大会を開催するなど，バスケットボールはインドオリンピック委員会の手に委ねられ，1936年には FIBA への加盟が認められている．その後，1950年に，マドラスの YMCA 体育大学のシュリ.C.C. アブラハム（Shri C.C.Abraham）学長が中心となって，インドバスケットボール連盟が立ち上げられて，オリンピック委員会から独立した[19]．

さて，７月28日（水）にセイロンのコロンボからインドに移動したが，最初の訪問地がマドラスだったのは，おそらく，ここに YMCA 体育大学があってのことだと考えられる[注17]．それはともかくとして，1955

年にアメリカのF.カウフマン（Frank Kaufmann）[注18]が200名の受講生を6回に分けてコーチ講習会を開催した．さらに，1957年には別のアメリカ人が5回にわたってコーチと審判の講習会を行なった．そして，1965年にはアジアバスケットボール連盟（現FIBAアジア）への加盟が承認された．同年の第3回アジア選手権に出場し，10チーム中の7位となった．また，1967年の第4回同選手権では10チーム中の6位となっている[20]．

8月19日（木）にパキスタンのカラチに移動するまでの間，このインドに3週間ほど滞在した．次のようなインドの思い出を語っている．

「マイソール王国時代の信じがたいほどの華美，豪華な宮殿には圧倒された．また，白い大理石のタージマハル霊廟の美しさにも感動した．そして，マイソールから20マイルほどのインド最大のダムに近いブリンダバン・ガーデンズも素晴らしかった．」[21]

アメリカ国務省教育文化局から与えられたミッションが最優先なのは当然のことだが，そのかたわら，SCの学生として，そのタイトなスケジュールをぬって，休養を兼ねて外国の歴史・文化に触れる機会も配慮されていたことが推察できる．

❸パキスタン

8月19日（木），ニューデリーからパキスタンのカラチに移動した．1955年までのこの国のYMCAはインドとセイロンのYMCAと非常に近しかった．1875年にパキスタンにおける最初のYMCAがラホールで組織されたが，1895年には運営，維持のためにインドYMCA同盟に助力を求めている．その後，1917年にアメリカ・カナダYMCA同盟から2名のフルタイムスタッフが派遣されて来た．また，これとは別に1905年にカラチにYMCAが創設され，1913年にはアメリカ人のフルタイムスタッフが着任して，順調に拡充していった[22]．そういう状況のもと，アメリカ人の宣教師たちによって，バスケットボールがYMCAなどに移入された．とくに，草創期はラホール，ラーワルピンディー，シアールコートなどの各地がその担い手になった．1938年にはラホールでYMCA大会が開催されたのに続き，州内各地でも行なわれた．そして，パンジャーブ州と言えば，あたかもパキスタンにおける“バスケットボール聖地”のようになり，1940年に入ってパンジャーブバスケットボール協会が結成された[23]．

第2次世界大戦が始まると，インド，ビルマ（現ミャンマー），セイロンとともにYMCAはパキスタン軍の支援にあたり，カラチYMCAはさながら‘陸軍YMCAセンター’となった．これにラホールYMCAも続いた．けっきょく，YMCAはパキスタン人だけで維持される陸軍施設と化していた．終戦後，ラホールYMCAの会員はイスラム教徒および（イスラム教とヒンズー教とを融和させようとする）シーク教徒だけになっていた．そして，1947年にインドと分割されると，それまでYMCAの運営を実質的に担っていたアメリカ人などの外国人（非イスラム教徒）スタッフはラホールを離れてインドに去ってしまい，バスケットボールを担う者がいなくなってしまった[24]．しかし，ラホールにあるフォーマンクリスチャン大学[注20]の教員などがバスケットボールの復活に尽力した．そして，1952年にパキスタン選手権大会を開催するまでになり，パキスタンバスケットボール連盟の結成が実現した．1954年にはインド代表チームを招待して，親善ゲームを3戦行なっている．さらに，ラホール，リアルプール，ラワールピンディー，シアールコートなどで地元チームと5ゲーム行なった．これが1956年にイラン，1959年にセイロンが加わり，「4か国選手権」となった．前年の1958年にはFIBAへの加盟が認められている．1962年のパキスタン連盟が主催したラホール国際選手権はイラン，インド，パキスタン，セイロンの順位だった．この選手権は1963年，1964年と続けて行なわれている．パキスタンはSCチームの訪問後の1969年にはバンコクでのアジア選手権に出場したが，9チーム中の8位だった[25]．

滞在中の親善ゲームには，SCチームが思わず慌てる対戦もあったようだ．次のような回想が残っている．

「ペシャワール近くにあるアメリカ空軍基地のエアコンの効いた体育館で，アメリカ兵とパキスタン兵の合同チームと対戦した．結果的には81−51で勝ったが，前半は苦戦した．理由は6週間も屋外でやっていたので，久々の屋内コートでちょっと戸惑ったことにある．9月3日（金）のラホールでのパキスタン西部州鉄道会社チームとのゲームは屋外コートだった．パキスタンとインドの地元の人々だけが見守る完全なアウエー戦で，いやがうえにも，テンションが上がったが，88−63で退けた．」[26]

また，帰国してから，パキスタンの思い出として，このようなことを述べている．

「コハトとペシャワールを結ぶ山道のバス移動は強烈だった．ドライバーが危険極まりない悪路を物ともせず，肝をつぶすような運転でぶっ飛ばして，生きた心地がしなかった．今でもあの恐怖のバス旅がはっきり頭の中に残っている．」[27]

さらに，次のようなことも語っている．

「武器の扱いに長けているパターン族[注21]を訪問したのは二度とあり得ない複雑な経験だった．パキスタンの国内人口では多くないそうだが，政財界，軍や警察の中に相当の影響力を確保しているらしい．パキスタンとインドの対立[注22]に，あの残忍な戦闘員たちが関与していることを知って，恐ろしさを感じた．」[28]

カラチでの活動が終わりに近づいた８月25日（水），カラチのアメリカ大使館を代表して，W.B. キング（Williams B.King）広報官がSCチームを昼食会に招待して，今回の２週間ほどの各地への訪問活動に謝意を表し，ハードなスケジュールの疲れをねぎらった．ゲストとして，地元チームおよびバスケットボール協会の関係者，カラチ市教育課職員なども招かれた[29]．関連して，W.P. マッコノーイ（Walter P.McConaughy）大使も次のようなメッセージを寄せている．

「パキスタンの次代を担う多くの子どもたちが，SCチームとの交流と練習の場を通じてバスケットボールを学び，興味関心を持ってくれた．ゆくゆくはこの国のメジャースポーツのひとつになるかもしれない．また，SCチームのほうも地元の愛好者，協会や学校の関係者たちの心からの好意と友情を感じ取って，胸に迫るものがあったと信じている．」[30]

この後，SCチームは８月29日（日）にパキスタンのバスケットボールの沿革において絶対に外せないラホールに移動した．カラチのアメリカ大使館のW.P. マッコノーイ大使は自身のメッセージのなかで，次のようなことも述べている．

「これからペシャワール，ラワールピンディー，ラホールも訪れると聞いている．まさに，この国では“東奔西走の日々”となりそうだが，友好親善の絆が生まれるよき滞在となることを願っている．」[31]

いかに，SCチームの来訪が期待され，（結果として）いかに活動が高く評価されたのかを如実に示す証左と考えられる．また，学生として，実に貴重な見聞を重ね，またとない南アジア体験ツアーであったとも換言できよう．９月４日（土），ラホールからインディアン航空（IC）でニューデリーに移動，翌日の早朝にホンコンに飛び立った．９月７日（火）に東京に到着．翌８日（水）に日本大学と対戦，そして，９月９日（木）に東京を発ち，ホノルル経由で帰国した．最後のフライトになったのはサンフランシスコからニューヨークに向かうアメリカン航空（PA）014便だった．後日，プレーヤーたちは異口同音に「もっとも忘れられないのはジェット機で西海岸側からアメリカを横断して東海岸側に着くまでの最後のフライトだ」[31]と振り返っている．

そして，帰国からおよそ１か月後に，アメリカ国務省からSCに謝辞が届いた．

「この度の貴学男子バスケットボールチームのセイロン，インド，パキスタンへの歴訪が多大な成果を収めたとの報告をうけた．小職には実に喜びに堪えない朗報であり，南アジアにおけるミッションに対するチームのプレーヤーとしての学生およびスタッフの誠実な態度，真摯な尽力の賜物であると確信している．南アジア３か国にあっては困難が多い日もあったと聞いている．にもかかわらず，各国各地でチームが大歓迎され，活動が終わるたびに大きな感謝をうけたことはなにものにも代えがたい快報である．このたびのスポーツを通じた国際親善交流事業に対する貴学のご高配に，本省を代表して心から感謝申し上げる．チームの学生および優れたリーダーシップを発揮してミッションを完遂させた監督のE. シュタイツ博士にはよろしくお伝えいただきたい．」[注23][32]

こうして，「33,000マイルを歩き，講習会を開催，25ゲームに全勝したSC男子バスケットボールチームのワールドツアー」[33]が終わった．

４．結　語

本研究ではSCチームが訪問したセイロン，インド，パキスタンのバスケットボールの歩みとSCチームの活動を追究し，これに付随した事柄を重ね合わせて，南アジア３か国の1965年頃までのバスケットボールの実情を掘り起こすことを試みた．そして，次の諸点を明らかにすることができた．

１）SCが抜擢された理由

次のようなことが指摘されている．

「なぜ，SCなのか？―と，疑問を抱く人もいるかもしれない．その理由はなによりもSCはNCAAのディビジョンⅠの有名校でもないし，アメリカの大学バスケットボール界で大きな注目を浴びるような存在でもないからだ．ところが，この大学は紛れもなくバスケットボールの誕生地である．このことがアメリカを代表して南アジアへ派遣される理由の根拠であったとすれば，誰しもが納得せざるを得ないのではないか．」[注24][34]

つまり，アメリカ国務省がSCにミッションを託す

ことにしたのは，まさにこの言説が言い尽くしていると考えられる．

2）訪問国の YMCA の存在

繰り返すまでもなく，SC は“YMCA スクール”であり，多くの卒業生たちのグローバルな雄飛が行く先々の YMCA の設立と，そこを拠点にしたバスケットボールの伝播へと繋がっていった．

3）YMCA 関係以外のバスケットボールの伝播への貢献者

かつて第一次世界大戦のさい，ヨーロッパに赴いたアメリカ軍の兵士たちが伝播の役割の一端を担ったとされる．南アジアでも同様な部分があった．また，それとは別にアメリカから渡来した篤志家の教育面へのまさに特筆に値する貢献もあった．

4）SC チームの優れた国際感覚

「スポーツの大切さ」として，国籍，宗教，文化，肌の色を超越して世界の人々に一体感をもたらす―，と言われるのは日常よく耳にする．翻って，SC チームが訪れた国々は宗教を例にとればヒンドゥー教のインド，仏教のスリランカ，イスラム教のパキスタンであり，まさに混成文化地域である．学生たちはその‘るつぼ’にあって，バスケットボールを通じて見事に馴化した．

5）SC チーム訪問の成果

直近の 3 カ国の「FIBA ランキング」[注25] の順位が示されている．パキスタンはランキング外である．

表 2　FIBA ランキング

	ランキング	
	アジア	世界
スリランカ	26	117
インド	12	67
パキスタン	―	―

もとより，わずか数日の短期練習によってチームの力量が一気に向上，戦績が急好転という即効性はあり得ないのは，バスケットボールとて例外ではない．そういう意味では，SC チームはインド，スリランカ，パキスタンにおいて，それぞれがバスケットボールの種蒔期が概ね終わり，成長期へ移行していく時期の有形無形の“触発効果”をもたらした．

謝　辞

ACKNOWLEDGEMENT

I deeply thank you for the generous help of the Springfield College Library Service for my research, in particular, of Mr. Jeffrey L. Monseau, College Archivist.

〈　注　〉

注 1）1965年 9 月 8 日付朝刊で，朝日新聞は『きょうのスポーツ』（13面），讀賣新聞も『きょうの運動』（8面）でそれぞれ「バスケット　スプリングフィールド大―日大（午後 5 時30分代々木体育館別館）」と報じている．

注 2）朝日新聞は翌日の朝刊の『八日の記録』（12面）で，「◇バスケット　日米交歓試合（代々木体育館別館）74–61（35–29）」と伝えている．

注 3）William W. Bradley. プリンストン大学時代は 1 ゲーム平均30点という記録を残す．

1964年の東京オリンピック出場，金メダル獲得．1965年の NCAA 選手権で58得点したゲームも．（Naismith Memorial Basketball Hall of Fame（1987）The official Souvenir Book, The Bordeaux Company, p.97）．

注 4）Edward S. Steitz．1946年にコーネル大学卒業，1948年からスプリングフィールド大学男子チームのコーチングスタッフに．10年間のヘッドコーチ時代は210勝，勝率71％を収める．キャンパスでは体育局長，学外では NCAA やオリンピック委員会の要職を歴任．NCAA や FIBA の競技規則の解釈の第一人者としても知られる．アメリカ国内にとどまらず，30か国以上とバスケットボールのコネクションを持っていた．（Naismith Memorial Basketball Hall of Fame（1987）The official Souvenir Book, The Bordeaux Company, p.100）．

注 5）依拠不明だが，次のような一文がある．当時の日本バスケットボール協会を意味する‘JAPAN AMATEUR BASKETBALL ASSOCIATION’が記されているので，協会の手によるものと推測できる．また，内容が日本とスプリングフィールドの新聞報道と符合するので，その信憑性は高いと考えられる．

「スプリングフィールド大学と
バスケットボールは切り離すことが出来ません．
それは＿＿＿＿，

1891年12月，ジェイムズ・ネイスミス博士によって，世界で初めてバスケットボールを考案，発表したのが，この地なのです．そして，翌1892年には，13のルールを造り，大勢の人を集めて試合を披露したのも，この大学なのです．この13のルールは現在も生かされている立派なものでした．このように，74年間の歴史を持つバスケットボール最古の大学です．

この大学の基調は，「精神」「知性」「肉体」の三つの柱からなり，これは，現在の YMCA の標語ともなっています．この言葉が示すように，スプリングフィールド大学は世界でも有数な体育学校で，卒業生は，学校の先生や体育コーチとして，広く活躍しております．

今回は，アメリカ合衆国教育文化使節団として，東南アジアの旅の途中に来日したものです．平均192cm，83kgの恵まれた体格を持ち，過去５年間において87勝38敗の好成績を収めているチームです．JAPAN AMATEUR BASKETBALL ASSOCIATION」.

また，SC が所蔵しているスコアシートは前年のオリンピックで使用され，残っていた公式エンブレムが刷り込まれたもので，「時刻：午後５時23分，審判：藤堂（主審）ウォーカー（副審）」などと記されている．スコアは SC が前半35−29，後半39−32のトータル74−61だった．

注６）FIBA の現行の区分けではアジアゾーンの中の「南アジアサブゾーン」に該当する．本研究では，引用文以外はここでは「南アジア」と表記する．（https://ja.wikipedia.org/wiki/FIBA アジア，参照日：2019年５月８日）.

注７）たとえば，Sport in Asia:Globalization, Glocalization, Asianization（Perter Horton, 2011）の中の The US and sport in Asia と題する一節は興味深い．

「19世紀後半におけるアジア地域では筋肉鍛錬思想を高揚したクリスチャニティの意義と価値を説く YMCA のアメリカ人の宣教師たちの影響が大きかった．具体的には会員たちにバスケットボールやバレーボール，野球などのアメリカンスポーツ（の実践）を推奨した．つまり，伝道と（アジアの人々の）キリスト教への改宗の誘いが表裏一体となった宗教文化の広まりの手立てとして，アメリカンスポーツがアジア地域に移入された」（https://www.intechopen.com/books/new-knowledge-in-a-new-era-of-globalization/sport-in-asia-globalization-glocalization, asianization・参照日：2019年６月25日）

注８）注目すべきは全行程の中でパンアメリカン航空の使用が多いことである．同社の歩みについては帆足孝治（2010）「パンアメリカン航空物語」（イカロス出版）に詳しい．それによれば，同航空は1958年に早くもニューヨーク（現在の J.F. ケネディ空港）からフランスのパリ・オルリー空港まで運航していた（pp. 178〜179）．また，当時の英国海外航空（BOAC．現在のブリティッシュエアウェイズ：BA）はロンドン→ローマ→ベイルート→カラチ→カルカッタ→ホンコン→東京というルートで運航していたが，PA はまだローマ〜ニューデリー間の運航は充実していなかった（pp. 183〜184）．したがって，７月15日（木）〜９月５日（日）は現地航空便を使用したと考えられる．また，同航空の当時の太平洋路線は羽田からホノルル経由でサンフランシスコに到着するフライトだった（p.184）．なお，同航空をメインで使用したのはジェット機時代の先駆けとなった同航空の“国際線運航力”を信頼していたアメリカ国務省側の配慮だったのではないかと考えられる．SC も訪問地での配布用に作成したパンフレット（大学およびチーム紹介）の中で同航空の PR に１ページを割いている．（Springfield College（1965）The World Touring Team From The Birthplace Of Basketball, p.11）

注９）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.

注10）エア・セイロン航空（Air Ceylon）．1947年にスリランカのナショナルキャリアとして運航開始，1979年に破産，業務終了した．政府の手でエアランカ（Air Lanka）として新会社となった．因みに同社は現在のスリランカ航空（Sri Lankan Airline）なっている．（https://en.wikipedia.org/wiki/Air_Ceylon・参照日2019年４月29日）

注11）資料にはただ「“Surface-arrangements to be made locally”（陸上移動は地元で手配されることになっている）」としか記されていない．（Springfield College（1965）1965 Springfield College Men's Basketball Team World Tour，Springfield College Basketball Tour Papers.）

注12）カラチで最も人気のあるプロスポーツはクリケットで，次がサッカーだとされる．

（https://ja.wikipedia.org/wiki/・参照日2019年４月29日）イギリス系のスポーツが盛んで，バスケットボールは定着するのに難渋，立ち遅れていたのかもしれない．

注13）インドとの国境付近にあり，パキスタンではカラチに次ぐ人口規模を持つ第二の都市とされる．（https://ja.wikipedia.org/wiki/・参照日2019年５月１日）クリケットは大人気スポーツで，テレビでもよく中継されているほどだという．（https:// 4 travel.jp/travelogue/10170689・参照日2019年５月１日）

注14）インディアン航空．1953年に設立，2007年にエア・インディアと経営統合後，2011年２月に同社と完全合併した．（https://ja.wikipedia.org/wiki/・参照日2019年４月29日）

注15）1891年，J. ネイスミスが国際 YMCA トレーニングスクールで最初のゲームを行なわせた18名の学生のひとり．（E.L.Johnson（1979）THE HISTORY OF YMCA PHYSICAL EDUCATION, Association Press, p.153）

注16）インドではイギリスから伝わったクリケット，ゴルフ，テニス，ラグビー，ポロが主流で，初期の頃のバスケットボールも屋外スポーツだった．しかし，1920年にマドラスにこの YMCA 体育大学が開校されると，T.D. パットンからバスケットボールを教わった卒業生がインドの全国各地で普及する役目を果たした．（FIBA（1972）The Basketball World, Engelbert Mayer, p.97）

注17）SC チームがマドラスから去った後，８月２日付でマドラス地区バスケットボール協会の名誉主事 S. パドマナブハン（S.Padmanabhan）が，アメリカ広報文化局の文化担当官あてに，次のような書簡を送っている．

「SC チームがバスケットボールの講習会や公開ゲームのための訪問地として，まず初めに私どもマドラスをお選びいただいたことに感謝申し上げる．バスケットボールの生誕地であり，さらに，子どもたちや地域社会に尽くす専門のスタッフを〈宗教に拘ることなく〉養成する SC を今回のプロジェクトのために選択されたのは最適のご判断であったと敬意を表したい．小職は1960年のオリンピック・ローマ大会のさいに SC の

E. シュタイツ監督と初めて面識を得た．ここマドラスの子どもたちはその監督が率いるチームから〈当地でも急速に普及，振興を遂げている〉バスットボールのスキルのみならず〈正しく規律の行き届いたチームこそが目的を達成できる〉ことを学んだ．そして，連日の講習会に出席していたプレーヤー，協会関係者，コーチたちに〈どのようにバスケットボールと取り組むべきか〉，その“姿勢”の要諦を説いてもらった．SC の当地への訪問は間違いなくバスケットボール〈のプレイ〉および国際交流の難しさにチャレンジする貴重な‘呼び水’となったことをお伝えする．貴職のアメリカ広報文化局におかれては，これを端緒として，今後とも（SC チームのような）優秀なチームをわが国に招き，友好親善活動を続けていただきたい．今回の SC チームはみごとに（少なくとも）マドラスの人々の心をとらえ，友好を促進し，インドとアメリカの相互理解をいっそう深める“大使”役を立派に務め上げた」.

注18）F.Kaufmann. 高校卒業後，海軍に入隊．第２次世界大戦では太平洋地域での軍務に就いていた．終戦後，ノートルダム大学にバスケットボール奨学生で入学し，コーチの E. クラウゼ[注19] のもとでプレー．卒業後，アメリカ国務省がインドで開始したバスケットボール事業の親善大使に委嘱され，1955～56年に活動した．（Chicago Tribunes, 1999年12月25日付）また，この活動によって，インドのバスケットボールは飛躍的にレベルアップしたと言われている．（FIBA（1972）The Basketball World, Engelbert Mayer, p.97）

注19）E.W. “Moose” Krause（1913～1992）．リトアニア人．アメリカンフットボール，陸上競技，野球などもコーチしたが，バスケットボールでは1943～1944年と1946～1951年にノートルダム大学でヘッドコーチをつとめ，優れた戦績を収めた．1976年にネイスミス記念バスケットボール殿堂入り．（Naismith Memorial Basketball Hall of Fame（1987）Official Souvenior Book,The Bordeaux co., p.78）

注20）Forman Christian College．アメリカ南部の“アサ（麻）州”の異名を持つケンタッキー州の広大なアサ栽培農園（プランテーション）を営む家庭で生れた C.W. フォーマン（Charles William Forman）が創設した．20歳のとき，プランテーションで働く奴隷を救済する気持ちに駆られ，キリスト教の宣教師への道を志した．ニュージャージー州のプリンストン神学校に入学し，1847年に長老派教会聖職者に叙任された後，直ちにインドに旅立った．1849年，パンジャーブ州ランマハールに，イギリス統治下のインドで初の英語を公用語とする学校を創設，1865年に大学課程を置いた．布教伝道を基礎にした敬虔なクリスチャンスクールではあったが，一夫多妻のようなインドの風習をキリスト教の教義に馴染ませていく考えもあったという．（en.wikipedia.org/Charles_William_Forman，参照日：2019年５月５日）

注21）1947年から起きていたインドとパキスタンとのカシミール地方の領有をめぐる軍事紛争が1965年にも再発した．第二次印パ戦争とも呼ばれている．パキスタン軍に支援された北西部に住むイスラム教を信奉する部族であるパターン族がこの紛争の行方に影響力を持っていた．（https://kotobank.jp/word/ パシュトゥーン-860714，https://wpedia.goo.ne.jp/wiki/ カシミール紛争，参照日：2019年５月９日）

注22）SC チームがホンコンに滞在（９月７日）していた頃，第二次印パ戦争が起きた．当時の日本各紙は緊迫感ある見出しとともに詳報している．（朝日新聞朝・夕刊，1965年９月７日付）つまり，SC チームはどのような経緯でパターン族を訪れることになったのか不詳だが，偶然と思われる．軍事衝突が起きる直前のことであったと推測できる．

注23）書簡は C. フランクリン（Charles Frankel）から届いた．当時のジョンソン大統領政権の国務省教育文化担当補佐官で，1965～1967年在職した．ベトナムに対するアメリカの軍事介入に反対して辞職した．（https://en.wikipedia.org/wiki/Charles_Frankel・参照日：2019年５月９日）

注24）SC は NCAA ディビジョンⅢ. カンファレンスはアメリカ北部（コネティカット州とマサチューセッツ州）11大学で構成しているニューイングランド・女子・男子・アスレティックカンファレンス（NEWMAC）に1998年に加盟，現在に至っている．（https://en.wikipedia.org/wiki/New_England_Women%27s_and_Men%27s_Athletic_Conference・参照日：2019年５月18日）

注25）FIBA WORLD RANKING as of 26,February,2019（http://www.fiba.basketball/・参照日：2019年５月18日）

〈文　献〉

１）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.

２）Gene Dumbar（1965）As I See It, The BARRE, Weekly Circulation Journal 519.

３）Springfield College（1965）1965 Springfield College Men’s Basketball Team World Tour, Springfield College Basketball Tour Papers.

４）Springfield College（1965）1965 Springfield College Men’s Basketball Team World Tour, Springfield College Basketball Tour Papers.

５）The World Alliance of YMCAs（1969）THE YMCAs OF THE WORLD, The World Alliance of YMCAs, p.24.

６）E.L.Johnson（1979）THE HISTORY OF YMCA PHYSICAL EDUCATION, Association Press, p.157.

７）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960-1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.64.

８）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960-1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.64.

９）FIBA（1972）The Basketball World, Engelbert Mayer, pp.73-74.

10）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960-1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., pp.64-65.

11）Ceylon Western Province Basketball Association（1965）Springfield Souvenir 15–28 July 1965, p.3.
12）Ceylon Western Province Basketball Association（1965）Springfield Souvenir 15–28 July 1965, p.6.
13）Springfield College（1965）1965 Springfield College Men's Basketball Team World Tour, Springfield College Basketball Tour Papers.
14）在セイロンアメリカ大使からSC学長W.E.ロックリンあての書簡.（1965年８月11日付）
15）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
16）The World Alliance of YMCAs（1969）THE YMCAs OF THE WORLD, The World Alliance of YMCAs, p.59.
17）The World Alliance of YMCAs（1969）THE YMCAs OF THE WORLD, The World Alliance of YMCAs, p.61.
18）E.L.Johnson（1979）THE HISTORY OF YMCA PHYSICAL EDUCATION, Association Press, pp.153～154.
19）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960–1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.34.
20）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960–1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.35.
21）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
22）The World Alliance of YMCAs（1969）THE YMCAs OF THE WORLD, The World Alliance of YMCAs, pp.96–97.
23）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960–1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.52.
24）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960–1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., p.52.
25）ASIAN BASKETBALL CONFEDERATION（1985）Asian Basketball Confederation 1960–1985, Tonegawa Printing Co.,Ltd., pp.52–53.
26）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
27）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
28）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
29）MORNING NEWS, 1965年８月26日付.
30）MORNING NEWS, 1965年８月26日付.
31）MORNING NEWS, 1965年８月26日付.
32）アメリカ国務省C.フランクリンからSC学長W.E.ロックリンあてに届いた書簡（1965年10月18日）
33）THE SPRINGFIELD SUNDAY REPUBLICAN, 1965年９月19日付.
34）Kevin DoyleJun（2013）1965 Springfield College basketball team, John Calipari, Derek Kellogg, and Bruiser Flint inducted into New England Basketball Hall of Fame.（collegebasketbal.nbcsports.com・参照日2019年５月13日）.

（2019年５月31日受付
2019年７月15日受理）